
効果的な英語学習指導に向けて

—学習者の文法運用力調査—

佐藤 敏子
中川 武
岡田 あずさ

1. はじめに

英語教育を取り巻く環境は近年ますます厳しくなっている。「学校の英語は役立たず」「実用英語重視」という実業界からの要請がある一方、学習者の基礎学力の低下、指導者の意識改革の遅れなど様々な内容が含まれている。

小池（2000）は「外国語教育の危機」として次のような点を挙げている。

- (1) 英語コミュニケーション能力の到達度の低さ
- (2) 日本人学習者に特有な学習パターン—正確さと文法理解に関心・少ない語彙力と短文中心・多読と内容把握に弱い
- (3) 小・中・高・大の一貫した英語教育の欠如
- (4) 教師が文法訳読主義に固執
- (5) 抜本的言語教育政策が出てこない—英語教育の改革の重要性の認識がない
- (6) 大学設置基準のカリキュラムの大綱化に向けての改革による外国語教育の弱体化

小池の指摘の多くは現在の英語教育の問題点をついているが、(2)の文法理解については必ずしも現場の声を反映しているとは思えない。伊村（2000）は英文科の学生の文法基礎力の低下に対応するために、本年度より「学習文法」の授業を実施することを報告している。その中で従来中・高の英語教育の中で実施されてきたはずの「練習」が足りないのではないかという指摘がある。すなわち基礎訓練が不足しているために、外国語として英語を学習する日本の学習者が、この学習過程では「文法」を獲得できていないのではないかという指摘である。筆者らも授業展開の中で痛感することは「学習者の多くが中・高の英語教育の中で、英語を『聞いたり』『話したり』『読んだり』『書いたり』するための基礎的学習をしないで（基礎的訓練を受けずに）大学に入学してくる」ということである。「日本人は英語を読んだり書いたりするのは得意だが、聞いたり話したりすることは苦手」だといわれているのが根拠のないことと同じように、「文法は得意」というのも根拠がないことのように思われる。

平成8年度よりリスニング指導法に関する研究を続けていく中で、平成11年度佐藤・中村（2000）

の実験では「聴解力は文法運用力と相互補完の関係にある」という研究成果を得た。とくに聴解力の伸長の見られない学習者の文法運用力は著しく低く、大学の英語カリキュラムを根本的に変えることを迫る結果である。「文法運用力の習得」が英語の基礎的学習内容であるのは疑う余地のないことである。朝日新聞（平成12年9月12日朝刊）に、国立大学協会の第2常置委員会がセンター試験の科目数を増やして大学生の基礎学力の低下に歯止めをかけようとしている、という記事が載った。学生の基礎学力の低下は、既に大学関係者の共通認識であるといつてよいであろう。

以上のことから、本研究では「効果的な英語学習のカリキュラムを設計するために基礎データとして学習者の文法運用力を知る必要がある」として、学習者が英語学習の基礎的能力である文法運用力に関して、どの項目について習得しているのか（習得していないのか）を調査することとする。

2. 調査計画

前章の研究目的に基づき、平成12年度は以下のような調査計画を立てた。

(1) 調査対象

今回実施した調査は14回に及ぶものである。調査の信頼度を上げるために14回全て出席した学習者のみを対象とした。

- ①対象 4年制大学新生（英語を専攻としない学生）51名
- ②調査時期 5月上旬から6月下旬（週2回実施）

(2) 調査内容

「文法運用力とは何か」ということを定義するのは非常に難しいことである。また岡田（1999）も文法力を測定することの難しさを述べている。ここでは「英語の文を作り出す力（competence）」の基礎となる能力として時制（tense）と受け身（passive）に絞って調査をする²⁾。

以下が調査項目である。（実施されたテストは資料1を参照）

- (1) be 動詞現在（am/is/are）
- (2) 現在進行（present continuous）
- (3) 一般動詞現在（present simple）
- (4) 一般動詞現在否定（present simple negative）
- (5) 一般動詞現在疑問（present simple questions）
- (6) 一般動詞過去（past simple）
- (7) 一般動詞過去否定・疑問（past simple negative and questions）
- (8) be 動詞過去（was/were）
- (9) 現在完了1（present perfect 1）
- (10) 現在完了2（present perfect 2）
- (11) 現在完了3（present perfect 3）

- (12) 受け身 (passive)
- (13) 未来1 (be going to)
- (14) 未来2 (will)

3. 調査結果

(1) クラス分けの基準

全被験者は2000年4月に実施された以下の3つのテストの合計得点によってA学科・B学科内においてそれぞれ上位群，下位群に区分された。(2)と(3)はまとめて1つのテストとして実施され，最終的にはA1，A2，B1，B2の4グループで14回の文法能力テストを全て受験した被験者（全51名）が分析の対象となる。

- (1) JACET Basic Listening Comprehension Test Form A（リスニングテスト）
- (2) リーディングテスト1（多肢選択形式）
- (3) リーディングテスト2（クローズテスト）

(2) 正答率

表1，図1はグループ別および全体の正答率・グラフである（各テストの平均点，標準偏差などの基礎統計は資料2を参照のこと）。14の調査項目中最も高い正答率（93%）を示したのは問題8

表1 グループ別・正答率表（%）

問題番号	調査項目	A1	A2	B1	B2	全体
1	be 動詞現在	40	80	71	85	74
2	現在進行	36	53	57	84	63
3	一般動詞現在	27	48	56	82	60
4	一般動詞現在否定	24	70	61	87	67
5	一般動詞現在疑問	24	38	27	53	37
6	一般動詞過去	44	78	67	95	75
7	一般動詞過去否定・疑問	14	27	19	70	35
8	be 動詞過去	84	90	92	97	93
9	現在完了1	24	40	37	41	38
10	現在完了2	44	38	49	87	58
11	現在完了3	12	35	39	64	43
12	受け身	20	33	46	73	50
13	未来1	28	60	68	91	70
14	未来2	0	47	38	63	46
全体		30	52	51	76	52

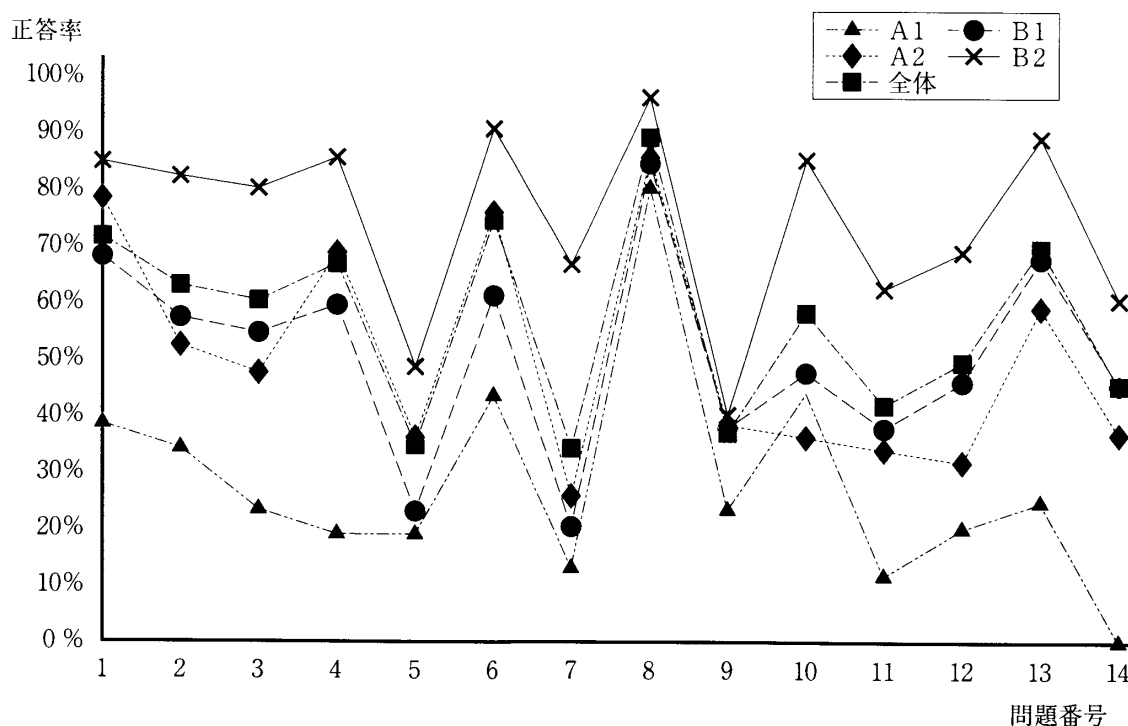


図1 グループ別・正答率グラフ

(be 動詞過去)である。ついで問題6 (一般動詞過去)が75%, 問題1 (be 動詞現在)が74%, 問題13 (未来1 be going to)が70%と続いている。その一方で, 問題5 (一般動詞現在疑問)では与えられた設問の複雑さがそのまま低い正答率 (37%)となっている。各文法項目の中でも一般的に苦手意識を感じる者の割合が高いと予想される「現在完了時制」に関する問題9 (現在完了1)および問題11 (現在完了3)も低調な正答率である (38%および43%)。

一方で4グループ間の正答率の差も非常に顕著である。問題7 (一般動詞過去否定・疑問)は数値上では一番正答率の低い (最も難しかった)項目となっているが, これはB2を除く他の3グループで著しく得点が伸びなかったことによるものである。このようにグループ間の差に注目した場合に, 全項目中でとりわけその差が大きかった (グループ全体の平均正答率の比較で50%以上の差が認められた)のは以下の項目である。クラス分けの判断材料として個々のグループの平均点を算出しているが, ここでは一例として4グループの中で最も平均点が低かったA1と最も高かったB2を比較した。(表2)。

この結果から, 改めて大学での指導開始時において既に学習者間の習得差が相当大きいことがうかがえる。特に未来時制を扱う問題13と14ではともに最大の平均差 (63%)が出ている。問題14の助動詞 will の用法ではA1グループでは正解者がいなかった。文法項目の難易度と今回実験に用いられたテストの難易度とは必ずしも一致しないが, 点数差を見る限りにおいてこの学習者間格差の存在は, 後述するように「習熟度別クラス編成」の早期実現を促すものである。

表2 グループ間・正答率差（A1・B2）（%）

問題番号	調査項目	A1	B2	全体	B2-A1
4	一般動詞現在否定	24	87	67	63
13	未来1	28	91	70	63
14	未来2	0	63	46	63
7	一般動詞過去否定・疑問	14	70	35	56
3	一般動詞現在	27	82	60	55
12	受け身	20	73	50	53
11	現在完了3	12	64	43	52
6	一般動詞過去	44	95	75	51

(3) 相関係数

ここでは全14テストの相関係数（資料3）から、特に関連の深いとされる項目について論じる（表3）。14回のテストの実施目的は「学習者がどの文法事項を習得し、また習得していないか」を明らかにすることである。テスト相互の相関係数に注目することで、14の項目同士がどのように関わり合っているかを検討する。問題1は「be動詞現在」の用法を問うもので、現行の指導用教材の

表3 相関係数（一部抜粋）

問題番号	調査項目	問題番号	調査項目	相関係数
1	be動詞現在	2	現在進行	0.37
1	be動詞現在	3	一般動詞現在	0.46
1	be動詞現在	8	be動詞過去	0.53
1	be動詞現在	12	受け身	0.32
1	be動詞現在	13	未来1	0.57
2	現在進行	13	未来1	0.53
3	一般動詞現在	4	一般動詞現在否定	0.48
3	一般動詞現在	5	一般動詞現在疑問	0.33
3	一般動詞現在	6	一般動詞過去	0.48
4	一般動詞現在否定	5	一般動詞現在疑問	0.54
4	一般動詞現在否定	7	一般動詞過去否定・疑問	0.66
6	一般動詞過去	7	一般動詞過去否定・疑問	0.50
9	現在完了1	10	現在完了2	0.36
9	現在完了1	11	現在完了3	0.52
10	現在完了2	11	現在完了3	0.53
10	現在完了2	12	受け身	0.58
11	現在完了3	12	受け身	0.67

大半では英語学習の最も初期（中学校一年時）に導入される内容である。現在時制の be 動詞について理解の不十分な学習者は、後に続く問題 8（be 動詞過去）の用法を理解することが一層困難になると予想される。両テスト間の相関係数を見ると中程度の相関（0.53）を示しており、この予想が正しいことが証明されたといえよう。また問題 1 と 13（未来 1）が 0.57 という相関を示したのは、be 動詞の習熟が不十分であれば、これを含んだ「be going to」が正しく使えないためと考えられる。問題 2（現在進行）と 13 についても、ともに be 動詞を含んだ表現を扱うため中程度の相関（0.53）となっている。

一般動詞のグループでは問題 4 と 7（一般動詞現在と過去の各時制）の間で 0.66 を記録したのを最高に、平叙、否定、疑問の各文体間においてもややばらつきはあるもののいずれも中程度の相関が認められる。現行の学習指導要領に基づき発行される指導用教材の大半では、学習項目の配列上「現在時制→過去時制」という順序で新しい学習内容が提示されるので、この相関係数はこうした情報の積み重ねに困難を感じる学習者が多いことをうかがわせるものである。

現在完了のグループは問題 12（受け身）との相関が高かった。動詞の活用形、中でも過去分詞形をどこまで正確に使えるかが両文法項目の習熟度として影響している。0.67 という高い相関を示した問題 11 と 12 は、正答率差（表 2）の結果でもともに上位に挙げられた文法項目であり、これらの項目の理解度が上位と下位の学習者を弁別する一大要因になっている。尤も過去分詞形を含んだ現在完了時制や受け身の習得段階になると、理解が不十分な学習者に対してはほとんどテスト項目が機能せず、そもそも得点の是非を論じること自体に意味がないという可能性も否定できない。知識として十分に定着していない能力をテストで問うことにはまだ議論の余地があると思われる。

4. 考察

(1) 正答率の高かった項目

ここでは正答率に注目し、結果に至った原因を考察する。

問題 8（be 動詞過去）の正答率が高かった理由は、動詞 be を適切な形に変えるのみという基本的な設問であったという点と、last night, last Friday など学習段階でその出現頻度が比較的高いと思われる語句を手がかりに解答ができることであったと思われる。続いて高い正答率を示した各項目について指摘できることは、いずれの項目も同様に平易な解答方法であり、被験者が過去これまで数多く接してきた一般的な設問形式（リストから適切な動詞を選び、次にそれを適する形にせよ、など）がテストへの「取り組み易さ」につながったと思われる。

(2) 正答率の低かった項目

一方、問題 5（一般動詞現在疑問）では正答率が伸びなかった。以下、設問の一部を例として挙げ、その理由を検証する。

Use the verbs in the list to make questions. Use the word (s) in brackets.

list : cost, do, go, have, like, rain, smoke, speak

(you) Excuse me, () English?

Yes, a little. (問題 5(1))

(it) How often () in summer ?

Not often. It's usually dry. (問題 5(3))

このように、高い正答率を記録した項目と比べると格段に設問自体が複雑かつ高度になっている。問題 5 で被験者は次のような点に留意しなければ正答を導けないであろう。

- (1) どの動詞をリストから選んで用いるか、また選ぶ段階でそれぞれの動詞が持つ意味の確認が正しくなされているか
- (2) 選んだ動詞の形をどうするか
- (3) どの助動詞を疑問文を作るのに用いるか
- (4) どこに括弧内の語を挿入すれば全体として適切な語順となるか

被験者の習熟レベルにもよるが、今回の場合はこの設問そのものがやや複雑すぎたのではないか。被験者が正答を得るまでに問われる要素が多すぎる、すなわち問題としての「密度」が濃すぎるということになる。問われる知識量が多くなると、当て推量や勘だけでは正答を得られなくなり、このことが問題 5 において下位のみならず上位能力者帯でも正答率が低くなった原因と考えられる。(1) では各動詞の意味と用法が問われ、(2) では動詞活用形の知識とその正確な応用が求められる。仮に被験者がこれら(1)と(2)を解決できても、(3)から(4)ではさらに裏付けとなる文法知識（一般動詞疑問文を作るルールおよび語順の知識）が必要となり、実際のところ彼らの解答（誤答）の中にもその痕跡（上記(1)から(4)の途中で挫折していると思われる、かなり正答に近い誤答）が数多く見受けられた。部分点を一切与えていないことも、より低い平均点を促す結果となった。もし明確な採点基準が確立されるのであれば、部分点や傾斜配点を採り入れるのもひとつの可能性である。

問題 9 - 11（現在完了時制）は、項目内容や時制概念の複雑さから苦手意識を持つ学習者が多いことが容易に推測でき、予想通りの結果である。その中で例外的に問題 10（現在完了 2）の平均点だけが低いのは、設問の設定方法にあると思われる。以下がその設問の一部である。

Write the questions beginning *Have you ever...?*

(sleep/in a park?) No, never. (問題 10(1))

(eat/Chinese food?) Yes, a few times. (問題 10(2))

このように、被験者の行う作業は単純である。書き出しが指示してある以上、あとは正しく動詞の過去分詞形が引き出せばよい。また Have you ever...? という定型は完了時制の導入で用いられる頻度が割合高いためか、被験者にとって親しみある事項なのだろう。この点に関連して久保田 (1989:21) は同じく日本人大学生を対象とした実験報告書の中で「いわゆる型にはまった構造や形式だと誤用が少なく、多少型からはずれただけでも極端に誤用が増えることが多い」と指摘し、加えて日本人学習者が日本語の発想に基づいた類推や過剰般化 (overgeneralization) を行うことや、全体の構造に対する関心が欠落し、中間言語に固執した統語パターンを使用する傾向があると述べているが、これらは習熟レベルの違いに関わらず、日本人の英語学習者全般に共通の傾向であろう。今後のテスト項目作成や教材選定の際、慎重に考慮されるべき事柄である。

(3) グループ間格差

全14項目中8項目という、過半数以上の問題項目で非常に大きなグループ間の格差が認められたことは、習熟度別クラス編成を念頭に置いた大学語学教育改革の必要性を改めて示唆することになる。今回の調査ではあらかじめ込み入った設問を排除し、また明らかに難易度の高い問題は出題しなかったにも関わらず、基本的事項を扱った文法テストでこのように大きな能力格差が出たことは「文法は積み重ね学習の賜物」であることの例証となるように思われる。能力格差があまりにも大きなクラスでの語学指導は、学習者のみならず担当教員の側にも大きなストレスになる。教員はどのレベルを基準として教材選定やクラス運営をするべきか悩み、指導内容にも自信を失いがちとなる。これが学習者にも伝播し、能力の高い者は授業に行き詰まりを感じて参加意欲を失い、逆に習得に不安を持つ者は「自分だけができない」という劣等感、無力感におそわれることになる。このような点を克服するために「学習環境」「教材」「学習者レベル」「指導方法」をより適切にし得る「習熟度別学習指導」を早期に実現しなければならない。

(4) 教材の精選と配列

各テスト項目の相関係数は、文法事項指導における学習内容の精選と配列の重要性を思わせる結果となった。文法知識はできる限り体系的に認識・習得されるべきであり、また知識を「文法運用力」として活用する機会が十分与えられなければならない。残念ながら現状では指導する側の効率性が優先され、学習内容の配列に関しても、ほとんど使用される教科書にそのまま沿う形で決定されてしまう。この点について高梨(1995:13)は「わが国の従来の教科書は、言語材料の配列がシラバスのすべてであるような印象すら与えていた」と批判し、さらに「その弊害を除くためには、文法を縦糸に、機能(function)を横糸にして織物を織るような教材編集の視点が求められる。そうすることによって、文法が形式至上主義に陥ることを防ぎ、この言語形式は何のために使われるのか(機能)、という視点が、指導する教師の側にも意識されることになる」と主張している。条件的な面での制約が多い中・高の段階では実現が難しいが、より自由なカリキュラム構築が可能な大学の英語教育では、学習項目の習得難易度を反映した柔軟なシラバス決定が重要である。

また「関連の認められる文法項目をまとめて学習する」こともシラバス作成方法のひとつである。このような効率化は、とりわけ中・高の段階で英語学習につまづきを覚えた学習困難者にとって大きな救いになると期待される。彼らの大半は学習の初期段階(「be動詞の疑問文と否定文の作り方」など)において既に内容理解に支障をきたしており、それをうまく克服できず、後に残された知識の整理が追いつかなくなるという経験を持っている。ここで改めて彼らに対して、必要最小限の文法項目を新たなシラバスの下で構成・整理し、指導することが急務である。最近活発な論議を呼んでいる「英語コミュニケーション能力」についても「中学校の学習内容が備わっていれば英語でのコミュニケーションは可能である」という見解などは「堅固な文法運用力がスピーキングやリスニングの大きな支えになる」ことがその前提になっており、このことは学習目的を失った者にとって新たな学習の動機付けになる点で、一層注意深く検討されるべき事項である。学習困難者に対する具体的な指導方法のひとつとして田辺(1995:10)は「意味の分かる文・語句をたくさん聞かせ、十

分に接触させる」ことを挙げている。基本構造の理解を定着させ、学習者に再び自信や達成感を味わわせることが何よりも大切だと解釈できよう。またコミュニケーションにおける文法知識の有益性に関連して高梨（1995:13）は「運用頻度を取り入れた文法指導の再体系化が必要である。（中略）英語圏での使用頻度を参考にしながら日本での教育的必要性を加味して、使用頻度を取り入れた英文法指導の体系化を図る必要がある」と改革の方向性を提示している。ここでの頻度とはすなわち「実用性」に相違なく、これもまた今後のシラバス決定の際に考慮されるべき事柄である。

今回の実験調査では、現在・過去（時制）、否定・疑問（文体）などの対立概念からなるテストがお互い時間的に近接しておらず、その間に他の文法事項テストを実施した上での結果を分析・検討している。今後の調査においては、各テストの配列を決定する際にそれぞれの文法事項の関連性をよく事前に検討するなど、さらに実験計画および実施段階での配慮が必要であろう。そしてテスト項目自体も改良を重ね、さらに洗練させていく必要がある。

5. 調査終了後の指導

今年度は調査終了後、採点済みの用紙を4つのパート（問題項目1～5、6～8、9～11、12～14）に分けて、学習者に返却した。学習者に対してそれぞれのパート毎に解説、練習をした後で、誤答をした部分について再度解答させ、提出させた。その際に理解が不十分の学習者は、個人的に指導者に質問をし、十分な理解をするまで指導を受けた。

以上の指導過程を経て、学習者の多くは今回の調査内容については十分な理解（正しい解答）をして、事後指導は終了した⁹⁾。

6. 学習困難者の文法運用力

ここでは、全体の平均点よりも得点が著しく低い学習者を対象に考察を行う。このような学習者の問題点を解明することは、今後の指導（法）を検討する上で重要な視点を与えてくれる。全14回の合計得点が15点以下だった者は合計5名で（15点、13点各2名・12点1名）以下にそのうち2名の得点を示す。被験者A（以下A）は平均して得点が低いのに対し、被験者B（以下B）はテストごとの得点にややばらつきがある。

表4 学習困難者2名の得点

問題番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
A	2	0	2	2	0	2	0	2	2	0	0	0	0	0	12
B	0	1	3	4	2	0	0	4	1	0	0	0	0	0	15

今回調査対象としたのは主に動詞の時制に関する文法運用力である。大学レベルの学習者の時制や態を調査したものには佐々木（1991）や神本（1998）があり、前者では時制概念を中心とした動

詞の用法について、後者では時制・態・現在／過去分詞について、いずれも学習者の理解が十分ではないと報告している。本実験における考察からも、2名の学習困難者の誤答分析の結果、動詞の時制に関して似たような傾向が確認された。その結果を(1)共通事項(2)個人的特徴に分けて論じる。

(1) 共通事項

2名に共通する特徴としては、①動詞の時制②受動態③一般動詞の否定文・疑問文における助動詞④人称・数の一致⑤前置詞⑥単語力などの問題が挙げられる。以下にその傾向を詳しく述べる。

①動詞の時制

今回の主な調査対象である動詞の時制に関する問題として、

- a. 時制の定型
- b. 分詞
- c. 動詞の変化形
- d. 時を表す副詞句

の4点が挙げられる。

a. 時制の定型

各時制(現在／過去／現在進行／現在完了／未来)の定型が正確に把握できていない。具体的には、現在進行形や未来形(*be going to*)で*be*動詞が必要であることや、現在完了形で*have/has*の後に過去分詞がくるとの認識がないようである。また*will*に関しては、助動詞であるとの認識がないのか、*Where will she be on these dates?*という問いに対し、*will*を用いず次のように答えている。

**She dates on Munich.* (問題14)

**She is the Paris.* (問題14)

どの時制も、意味(どんな時に使われるのか)・形(どのように否定文や疑問文を作るのか)ともに正確には理解できていない。

b. 分詞

現在分詞や過去分詞の使用に対する理解が曖昧であるため、下のように本動詞の位置に単独で使われるはずのない分詞がそれだけで現れるケースが多い。

**You (standing) on my foot.* (問題2(2))

**...the banks (opening) at 9:30 in the morning.* (問題3(3))

**Somebody (broken) that window.* (問題9(5))

神本(1998)の指摘にもあるように、ひとつの形が2つ以上の異なる時制や態において用いられる際に両者の混同が起きる。具体的には、現在分詞が進行形・未来形(*be going to*)に用いられる場合や、過去分詞が完了形・受動態に用いられる場合である。加えて、過去分詞は過去形とも混同される。

c. 動詞の変化形

動詞（特に不規則変化動詞）の変化形の習熟度が低い。そのため、選択肢の中から意味の上で適切な動詞を選ぶことはできても、それらを適当な形に変えることができず得点に結びつかないことが非常に多い（4. 考察を参照）。なお、正しい過去形・過去分詞形が用いられなかったのは次のような動詞である。

clean, make, show, lose, meet, read, take, go, build, speak, come, buy, see, write

過剰般化によるためか、不規則変化動詞だけでなく clean のような規則変化動詞も適切な形に変えることができない。

d. 時を表す副詞句

同一文内における時を表す語句から、文の時制を判断できない。now, everyday が現在時制とともに使われることは習得されているが、usually, always などが現在／現在完了時制, ago, last week などが過去時制, for, since が完了時制とともに使われることが理解できていない。時制の一致についても理解が不十分で、先行する文の中で過去形が用いられているにも関わらず、続く文の中で現在形の動詞を用いている。なぜその時制を使わなければならないかの理解が十分になされていない。

②受動態

be 動詞は主語の人称・数に合った適切なものを選択できているが、①c. でも述べたように、それに続く過去分詞が適切な形に直せず、正答とならないケースが多い。

③一般動詞の否定文・疑問文における助動詞

一般動詞の否定文・疑問文において助動詞 do/does/did の使用に若干のばらつきがある。現在時制の否定文は作ることができても疑問文はできなかったり、また、過去時制になると否定文・疑問文ともに助動詞を用いなかったりする。まれに疑問文や否定文の中で does を使用しているにもかかわらず動詞に-sがついたままの場合もみられるが、これも will 同様、do や does が助動詞であるという認識がないことが原因であろう。特に、疑問詞が文頭にくる疑問文において助動詞が用いられるという認識が低いようである。このような疑問文の正答率が低い理由には、既に述べたように、疑問文を作る際に学習者が考慮しなければならない要素が多いことも関連していると思われる（4. 考察を参照）。

④人称・数の一致

主語と be 動詞・助動詞 (have/has, do/does) の人称・数における呼応は (somebodyなどの場合を除けば) ほぼ習得されているようである。ただし一般動詞については人称と一致していない例もみられる。

⑤前置詞

前置詞の意味や機能が把握できていないようである。*Have you ever been New York? (問題10 (3)) のように前置詞を用いなかったり、地名の前で on などの不適切な前置詞を用いたり間違いのパターンも様々である。

⑥単語力

単語力が乏しい。下の例は (Mr. Kelly's daughter six years old) に適当な be 動詞を補って文を完

成させよ, という問いに対する解答である。

*Mr. Kelly's was daughter six years old. (問題 1(2))

daughterの意味や品詞が分からなかったために正しい解答を導き出せなかったと思われる。とりわけ, 動詞の do, rain に対する認識が低い。特に学習困難者の間で前者は助動詞と, 後者は名詞と混同されるケースが非常に多い。

(2) 個人的特徴

続いて, A・B 2名の学習困難者の解答傾向を分析する。

① Aの場合

Aの問題点としては a. 基礎的な文法事項 b. 動詞と目的語句の関係 が挙げられる。

a. 基礎的な文法事項

to の後 (例 be going to) の動詞は原則として原形であることや, I think で始める複文の作り方など, 基礎的な文法事項が把握できていない。

b. 動詞と目的語句の関係

Aの特徴の1つとして, 動詞と目的語(句)の関係が把握できていないことが挙げられる。例えば, 括弧内に適語を選んで入れる問いでAは次のように解答している。

*We usually (meet) dinner at 7 o'clock. (問題 3(1))

「私達はたいてい7時に夕食で会う」くらいの意味なのであろうが, 英語の文としては不適當である。本来 dinner を「夕食を」と捉えてそれにあてはまる動詞を探さなければならないところを, dinner が目的語であるとの判断ができないために, dinner と関連がありそうな meet が選択されている。他にも *go the shopping という解答があるが, go ~ing という表現が押さえられていないことと併せて, ここでも動詞と目的語の関係が曖昧であることがわかる。

Aの場合, 形・意味の両方において解答にある程度の傾向性がみられるため, 指導する際も習得できていない項目だけを集中的に扱うことができ, 学習効果もある程度期待できるように思われる。項目毎に何らかの規則性を見つけようとする姿勢は, 分類・系統立てによる学習につながるからである。

② Bの場合

一方, Bにみられる問題点としては a. 文の構造 b. 単語不足 c. 名詞と代名詞の関係 が挙げられる。

a. 文の構造

Bは be 動詞を入れる問いにおいて be 動詞を全く使用せず, 全て下のような句の形で答えている。

*My dirty very shoes (問題 1(1))

*Mr. Kelly's six years old daughter (問題 1(2))

問題の意図が伝わっていなかった可能性も考えられるが, 句としても文法的に成立しない (ただし(2)は six-year-old ならば可)。やはり, 英語の文に主語と動詞が必要であるとの認識がないと考

えるべきであろう。

b. 単語不足

意味の上で調査者が理解に苦しむ語の組み合わせが複数みられる。

*wash a lot of money (問題 3(4))

*teach his hair (問題 3(5))

学習者が単語の意味が分からなかったのか、あるいは意味を考えずに単語を選んだのかは不明だが、指導上の注意が必要な学習者である。

c. 名詞と代名詞の関係

また下の問いは、括弧内に与えられた語句を使って疑問文を作るというものである。

(the children/play?) No, they're asleep. (問題 2(4))

この問いに対し、Bの答えは次のようなものだった。

(*Does they plays the children?) No, they're asleep.

学習者は play the children を「子供と遊ぶ」「子供を遊ばせる」のような意味で用いている可能性があり、その場合、先に見たAと同様に、動詞+目的語の関係が正確に理解されていないとも考えることができる。しかし *Does they plays the children? の they は後続する文の they're に引きずられて用いられたものであり、これは the children を they で受けることがはっきり認識されていないのが原因と思われる。同様に、Rod という人名を he で受けることも捉えられていない (問題 2(5))。

以上のことから、Aの場合とは異なり、Bは解答に一貫性を欠いているように見える。例えばある時は have + 過去形/過去分詞形を、またある時は一貫して have + 現在形を用いるなど、ひとつの項目に対してテスト間や問題間で異なる答え方をしている。Bのような学習者の場合、習得した知識を分類したり、複数の規則を関連づけたり応用したりする学習能力が低い可能性があり、指導する側には、各項目を系統立てて提示することが要求される。

上のような学習困難者2例の考察をまとめると次のようになる。

第一に、本実験における考察からも、佐々木 (1991) や神本 (1998) の実験結果と類似した結論が導き出された。

第二に、基本事項が抑えられていない。時制の典型や文の構造、加えて動詞の変化形や単語に対する知識の少なさが学習をますます困難なものとしている。「形の定着という点においては、従来の〔(受動態における・筆者補記) たすきがけ〕指導もあながち否定できない」とする小寺 (1999:71) の主張も見逃せない。

第三に、明示的な指示 (「次の文の動詞を過去形にせよ」など) には比較的よく対応できても、過去を表す語句の入った文において動詞を適当な形に変えることは困難なようである。これには、問題文の意味を捉えることや時制を文レベルで把握する習慣がないことが関係していると思われる。その理由の1つにそもそも英語が言葉として捉えられていないことが挙げられる。英語の規則を覚えることに必死になりすぎて、「昨日」と「～した。」や「3日間ずっと」と「～している」のような表現の呼応にあまり目が向けられない。日本語では理解できるこのような呼応表現が、英語に対

象を移したとたん分からなくなってしまう。学習者に、英語も日本語同様に意味やメッセージを有するコミュニケーションの手段として機能するということを理解させる必要がある。このような学習困難者を指導する場合、それぞれの時制や語句の意味・使い方を学習者が十分に理解できるよう、必要があれば、母語である日本語を十分に活用して定着を図ることも重要である。実際の使用場面を想定し、そこでの使用例を大量に与えて対象となる時制に対するイメージを定着させることも有効であろう。動詞の時制を変えることに学習者のエネルギーを使わせることよりも、各時制の定型とそれぞれの時制に合う表現を一緒に使ったり聞き取ったりする学習活動の方がその効果が上がることは明らかである。英語を用いて他者とコミュニケーションを図る場において、現在完了形を用いて話をする必要はあっても「文を現在完了形に」という指示を受けることはないからである。

7. 今後の課題

今回の調査は大学入学時の文法運用力、つまり、どんな文法項目が習得されているのか、あるいはいないのかを調べることが目的であった。詳細な分析の結果、文法項目別の相関がある程度明らかになり、今後の指導の大きな指針となった。学習者がどのような経路で解答に至ったかを特定することこそできなかったが、学習項目（内容）は知識として持っていてそれをどのように使ったらよいか分からない学習者・学習項目が予想以上に多く、文法運用能力の不足を示す結果となった。大学レベルでの基礎的な文法運用能力を示すデータは意外に少なく、その意味で今回の調査は大いに意味あるものであったといえよう。また、本調査によって大学入学時における学習者間の習熟度の差が予想以上に大きいことが明らかになり、習熟度別指導の重要性が改めて確認された。今後、調査項目の選定（内容および項目配列）および指導順序（言語配列）、指導法について検討を進めたい。

（さとう・としこ 産業情報学科）

（なかがわ・たけし 産業情報学科）

（おかだ・あずさ つくば国際大学非常勤講師）

注

(1) TOEFL Test and Score Data Summary 1999-00 Edition には、各国別受験者の平均点が出ている。テストは(1)Listening (2)Structure and Written Expression (3)Reading からなっており、日本人受験者の平均点は新しく導入されたコンピュータによる試験で(1)19 (2)19 (3)19（受験者20,554人）となっている。従来の筆記による試験でも(1)49 (2)51 (3)50（99,314人）となっており、各設問間に大きな差は見られない。南北朝鮮が筆記試験で(1)51 (2)54 (3)55（61,842人）、中国が(1)52 (2)55 (3)55（113,749人）と聞き取り能力に明確な弱点があることを考慮すると「日本人は読み書きは得意」という定説に説得力はない（点数はいずれも素点ではなく、標準化された得点である）。また最近TOEFLの点数を国家間で比較し「諸外国人と日本人との英語能力の優劣」を論じることがあるが、ここで各国の受験者数や受験者層に注目する必要がある。99,314人もの日本人受験者と、わずか535人のベトナム人受験者の平均点を、その学習環

境を考慮せず一様に比較してはならない。

- (2) 久保田（1988）の調査では日本人英語学習者の困難な言語項目は不定詞，分詞，助動詞の準動詞であり，時制文の誤用率は低いとしている。調査方法・内容・対象が異なるので単純な比較はできないが，時制文についても今回の調査では学習困難度（誤用率）が高いことがわかり，今後の継続的な調査が必要となる。
- (3) この指導終了後もこの内容について指導が必要と思われる学習者は6名である。

参考文献

- Clark, E. V. 1993. *The Lexicon in Acquisition*, Cambridge University Press.
- Educational Testing Service 1999. *TOEFL Test and Score Data Summary 1999-00 Edition*, ETS.
- Honey, J. 1997. *Language is Power — The Story of Standard English and its Enemies*, London: faber and faber.
- 伊村元道 2000. 「逆風の中，今こそむしろ英文法」『英語教育』vol. 49, No. 2, 8-9.
- 神本忠光 1998. 「大学での『やり直しの英文法の授業』における文法項目配列例—ing形と-ed形を中心に—」熊本学園大学文学・言語学論集第5巻第1号，93-111.
- 清川英男 1990. 『英語教育研究入門』大修館書店.
- 小池生夫監修 1994. 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店.
- 小池生夫 2000. 「総合戦略としての言語教育政策」『英語展望』No107, Summer 2000, 24-27.
- 小寺茂明 1990. 『英語の指導と文法研究』大修館書店.
- Krashen, S. D. and Terrell T. D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*, Alemany Press. 藤森和子（訳）1986. 『ナチュラル・アプローチのすすめ』大修館書店.
- 久保田章 1989. 「英語の複合構文習得上の困難点」『昭和63年度筑波大学学内プロジェクト研究報告書』7-28.
- Larsen-Freeman, D. and Long, M.H. 1991. *An Introduction to Second Language Acquisition Research*, Longman.
- Murphy, R. 1990. *Essential Grammar in Use*, Cambridge University Press.
- 新里眞男 1992. 「H. E. Palmer の指導法とその現代性」『筑波大学学校教育部紀要』第14号，275-290.
- Ohyagi, H. and Timothy, K. 1998. *Viva! San Francisco*, Macmillan Languagehouse.
- 岡田伸夫 1999. 「英語力の低下と文法力—文法のおもしろさを学生に知ってもらうために—」『英語教育』vol.48, No. 7, 17-19.
- Radford, A. 1981. *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory*, London: Cambridge University Press.
- 佐々木行雄 1991. 『応用言語学：理論と実践』ニューカレントインターナショナル.
- 佐藤敏子・中村典生 1996. 「つくば国際大学生の英語聴解力調査—JACET基礎聴解力標準テストを使ったデータ分析—」『つくば国際大学研究紀要』vol. 3, 93-106.

- 佐藤敏子・中村典生 1997. 「Shadowing の効果と学習者の意識」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 4, 47-57.
- 佐藤敏子・中村典生 1998. 「リスニングの指導法とその効果的な学習環境」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 5, 15-28.
- 佐藤敏子・中村典生 2000. 「英語聴解力と文法運用力」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 6, 55-65.
- 高梨庸雄 1995. 「なぜ文法が「悪者」になるのか」『英語教育』 vol. 43, No. 13, 11-13.
- 田辺洋二 1995. 「学校文法の行方」『英語教育』 vol. 43, No. 13, 8-10.
- 竹蓋幸夫 1984. 『ヒアリングの行動科学』 研究社.
- 田中敏・山際勇一郎 1994. 『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』 教育出版.
- 田崎清忠 1995. 『現代英語教育法総覧』 大修館書店.
- 植村研一 1996. 「脳から見た外国語教育」 語学ラボラトリー学会第36回全国研究大会講演資料.
- Ur, P. 1984. *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge University Press.
- White, L. 1989. *Universal Grammar and Second Language Acquisition*, John Benjamins Publishing Company. 千葉修司・ケビン・グレッソン・平川真木子(訳) 1992. 『普遍文法と第二言語獲得』 リーベル出版.
- White, V. W. 1988. *The ELT Curriculum*, BLACKWELL.
- 柳原由美子 1995. 「シャドウイングとディクテーションの効果について」 *Language Laboratory*, vol. 32, 73-90.

資料1 文法運用力テスト

- (4) (the children/play?)
No, they're asleep.
1. Write full sentences. Use am/is/are each time. (5) (what/Rod/do?)
(1) (my shoes very dirty) He's having a bath.
(2) (Mr. Kelly's daughter six years old)
(3) (the examination not difficult)
3. Complete the sentences. Use the correct form of these verbs.
boil, close, cost, go, have, like, meet, open, smoke, teach, wash
2. Complete the sentences. Use am/is/are + one of these verbs.
(1) We usually () dinner at 7 o'clock.
building, coming, having, cooking, standing, (2) I () films. I often () to the cinema.
swimming (3) In Britain the banks () at 9:30 in the morning.
(1) Look! Somebody () in the river. (4) Food is expensive. It () a lot of money.
(2) "You () on my foot." "Oh, I'm sorry." (5) Peter () his hair twice a week.
(3) Hurry up! The bus (). Ask the questions.

4. Write the negative.

- (1) I play the piano very well.
- (2) Jack plays the piano very well.
- (3) You know the answer.
- (4) She works very hard.
- (5) They do the same thing every day.

5. Use the verbs in the list to make questions. Use the word(s) in brackets.

cost, do, go, have, like, rain, smoke, speak

- (1) (you) Excuse me, () English?
Yes, a little.
- (2) (your sister) What ()?
She works in a shop.
- (3) (it) How often () in summer?
Not often. It's usually dry.
- (4) (they) What time () usually () to bed?
10 o'clock.
- (5) (you) What () usually () for breakfast?
Toast and coffee.

6. Write sentences about the past.

- (1) They always get up early.
This morning they ().
- (2) Bill often loses his keys.
He () last Saturday.
- (3) I write a letter to Jane every week.
Last week ().
- (4) She meets her friends every evening.
She () yesterday evening.
- (5) I usually read two newspapers every day.
() yesterday.

7. Put the verb in the correct form of the past (positive, negative or question).

- (1) We (wait) a long time for the bus but (not/come).

- (2) That's a nice shirt. Where (you/buy) it?
- (3) She (see) me but she (not/speak) to me.
- (4) "(it/rain) yesterday?"
"No, it was a nice day."
- (5) That was a stupid thing to do. Why (you/do) it?

8. Put in am/is/are/was/were. Some sentences are present and some are past.

- (1) I () hungry last night, so I had something to eat.
- (2) Where () you at 11 o'clock last Friday morning?
- (3) Don't buy those shoes. They () too expensive.
- (4) We must go now. It () very late.
- (5) Charlie Chaplin died in 1978. He () a famous film star.

9. Complete the sentences with a verb from the list. Use the present perfect (have/has + the past participle of the verb).

break, buy, do, go, lose, paint, read, take

- (1) I () some new shoes. So you want to see them?
- (2) "Is Tom here?"
"No, he () to work."
- (3) "() you () the shopping?"
"No, I'm going to do it later."
- (4) "Where's your key?"
"I don't know. I () it."
- (5) Look! Somebody () that window.

10. Write the questions beginning *Have you ever...?*

- (1) (sleep/in a park?) No, never.
- (2) (eat/Chinese food?) Yes, a few times.
- (3) (New York?) Yes, twice.

(4) (win/a lot of money?) No, never.

(5) (break/your leg?) Yes, once.

11. Complete these sentences.

(1) They are married. They () married since 1983.

(2) We live in this house. We () here for ten years.

(3) I know Tom very well. I () him for a long time.

(4) We are waiting for you. We () waiting since 8 o'clock.

(5) She has a headache. She () a headache since she got up.

12. Complete the sentences. Use the passive (present or past) of these verb.

build, clean, damage, find, make, show, speak

(1) The room () every day.

(2) Paper () from wood.

(3) There was a fire at the hotel last week. Two rooms ().

(4) Many different languages () in India.

(5) These houses are very old. They () about 500 years ago.

13. Complete the sentences. Use ...going to + one of these verbs.

eat, give, lie, rain, study, walk

(1) I don't want to go home by bus. I ().

(2) John's university course begins in October. He () engineering.

(3) Take an umbrella with you. It ().

(4) I'm hungry. I () this sandwich.

(5) It's Nancy's birthday next week. We () her a present.

14. Helen is going on a European tour next month.

Look at her plans. Where will she be on these dates?

6-7 Paris 9-11 Munich 11-15 Vienna 16-22 Rome

(1) (10th)

(2) (20th)

Write sentences with I think... All the sentences are future.

(3) (Diana/pass the exam)

I think ().

(4) (Jack/win the game)

Now write the sentence with I don't think...

(5) (they/get married)

資料2 テスト基礎統計

	平均	標準偏差	例数	最小値	最大値	分散	歪度	尖度	中央値
問題1	3.686	1.364	51	0.000	5.000	1.860	-1.091	.556	4.000
問題2	3.118	1.423	51	0.000	5.000	2.026	-.251	-.721	3.000
問題3	3.569	1.723	51	0.000	6.000	2.970	-.212	-.850	4.000
問題4	3.314	1.530	51	0.000	5.000	2.340	-.574	-.943	4.000
問題5	1.804	1.470	51	0.000	4.000	2.161	.267	-1.331	1.000
問題6	3.725	1.674	51	0.000	5.000	2.803	-1.005	-.342	5.000
問題7	2.412	2.183	51	0.000	7.000	4.767	.545	-.817	2.000
問題8	4.627	.774	51	2.000	5.000	.598	-2.135	3.733	5.000
問題9	1.863	1.296	51	0.000	5.000	1.681	.090	-.770	2.000
問題10	2.882	1.716	51	0.000	5.000	2.946	-.319	-1.218	3.000
問題11	2.157	1.891	51	0.000	5.000	3.575	.202	-1.443	2.000
問題12	2.471	1.837	51	0.000	5.000	3.374	-.031	-1.353	3.000
問題13	3.471	2.063	51	0.000	5.000	4.254	-.938	-.865	5.000
問題14	2.275	1.845	51	0.000	5.000	3.403	.015	-1.359	3.000
合計	41.373	15.900	51	12.000	70.000	252.798	-.114	-.952	39.000

資料3 テスト相関係数

	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	問題6	問題7	問題8	問題9	問題10	問題11	問題12	問題13	問題14
問題1	1.00	.37	.46	.37	.26	.43	.42	.53	.41	.60	.53	.32	.57	.28
問題2	.37	1.00	.37	.52	.28	.46	.58	.31	.25	.52	.45	.57	.53	.41
問題3	.46	.37	1.00	.48	.33	.48	.62	.42	.21	.52	.47	.48	.44	.39
問題4	.37	.52	.48	1.00	.54	.37	.66	.34	.20	.44	.58	.54	.41	.34
問題5	.26	.28	.33	.54	1.00	.30	.56	.23	.25	.37	.47	.49	.41	.25
問題6	.43	.46	.48	.37	.30	1.00	.50	.37	.39	.39	.51	.59	.50	.40
問題7	.42	.58	.62	.66	.56	.50	1.00	.29	.28	.58	.67	.52	.47	.36
問題8	.53	.31	.42	.34	.23	.37	.29	1.00	.23	.34	.41	.32	.40	.26
問題9	.41	.25	.21	.20	.25	.39	.28	.23	1.00	.36	.52	.38	.44	.21
問題10	.60	.52	.52	.44	.37	.39	.58	.34	.36	1.00	.53	.58	.48	.35
問題11	.53	.45	.47	.58	.47	.51	.67	.41	.52	.53	1.00	.67	.46	.37
問題12	.32	.57	.48	.54	.49	.59	.52	.32	.38	.58	.67	1.00	.49	.42
問題13	.57	.53	.44	.41	.41	.50	.47	.40	.44	.48	.46	.49	1.00	.47
問題14	.28	.41	.39	.34	.25	.40	.36	.26	.21	.35	.37	.42	.47	1.00

Abstract

For More Effective Teaching: the Data of the Learners' Grammatical Competence

Toshiko Sato, Takeshi Nakagawa and Azusa Okada

The purpose of this study is to examine which grammatical elements the Japanese university-level learners of English have acquired or not.

The research procedure is as follows;

- (1) setting up the fourteen grammatical items which should be tested,
- (2) putting each test into practice among the examinees as a data collection,
- (3) analyzing the data (on fifty-one cases) to find which grammatical items they have attained well or which points they have missed, and
- (4) conducting some follow-up tasks towards them.

The results of the experiment led to the following conclusions:

- (1) There is a huge discrepancy among the learners in terms of their grammatical competence of English.
- (2) There is a significant correlation among some test scores of the learners' grammatical competence of English.
- (3) There is a certain acquisitional/sequential order they should follow, for more effective grammar learning.

Keyword: communicative teaching, grammatical competence, tense, voice